

平成25年度遺跡報告会

資料

主催：東広島市教育委員会 共催：公益財団法人広島県教育事業団

会場：東広島市市民文化センター（サンスクエア東広島）

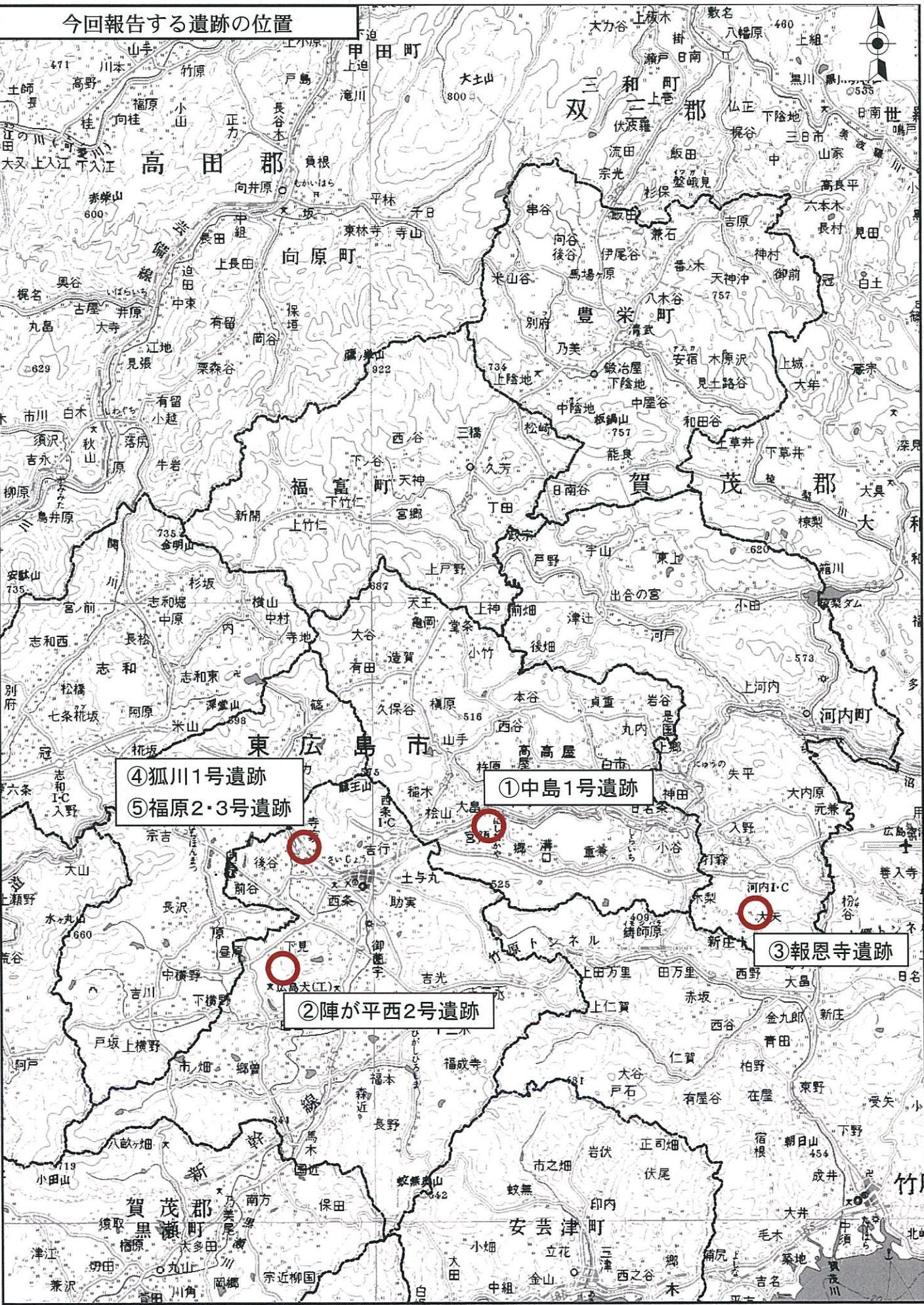
日時：平成26年4月19日（土）13:00～

□報告遺跡名

- ◆中島1号遺跡（高屋町中島）
- ◆陣が平西2号遺跡（西条下見五丁目）
- ◆報恩寺遺跡（河内町入野）
- ◆狐川1号遺跡（西条町寺家）
- ◆福原2・3号遺跡（西条町寺家）

□日程表

開会	13:00
① 中島1号遺跡の発掘調査	13:05～13:35
② 陣が平西2号遺跡の発掘調査	13:35～14:05
③ 報恩寺遺跡の発掘調査	14:05～14:35
（休憩）	14:35～15:50
④ 狐川1号遺跡の発掘調査	14:50～15:20
⑤ 福原2・3号遺跡の発掘調査	15:20～15:50
閉会	15:50頃の予定



中島 1 号遺跡の発掘調査について

東広島市教育委員会 文化課 津田真琴

1 調査の経緯

中島 1 号遺跡は、東広島市高屋町中島に所在する遺跡で、東広島高屋中島無線基地局新設工事に伴い発掘調査を実施した。遺跡の発掘調査面積は小規模で約 30 m²である。

2 地理的条件について

中島 1 号遺跡の所在する高屋町中島は J R 西高屋駅から南西約 500m、入野川沿いの比較的平坦な低丘陵上にあり、遺跡の北側 200m には高屋西小学校が立地する。周辺では弥生時代～古墳時代の遺物包含地である奥之谷遺跡と奥之谷古墳（前方後円墳：全長約 30 m³）などが見つかっており、同時代の集落も近くに所在していたと推測される。

3 調査の概要

中島 1 号遺跡からは土器棺 3 基（うち 1 基は土器蓋土坑墓）と 3 基の石棺を検出した。なお、なお、調査区範囲外からも土器棺 1 基と石棺 1 基を検出している。限定的な調査範囲で 7 基もの墓を検出したことから、当該地はかなりの規模の墓域であった可能性が高い。ほかに検出された遺構は土坑 1 基と溝状遺構 1 条のみでほとんど遺物も出土していないため詳細な時期、性格は不明である。

4 遺跡の特徴

- 中島 1 号遺跡検出の墓はその規模から石棺 1 をのぞき小児用と考えられる。
- ・土器棺 1 は大型の壺形土器の口縁部を割り取った後、残った胴部に石で蓋をし、石と土器棺の隙間に割った口縁部を差し込むことで内部を密閉していた。また土器の胴部には水抜き穴と考えられる欠損部がある。内部からの出土遺物はなかった。
 - ・土器棺 2 も壺形土器を割ったものだが、こちらは土器を半裁もしくは分割し、上蓋用と側壁用とに分け、側壁用に立て並べた土器の上下に石を配置した後、上蓋用となる半裁土器で蓋をして、さらにはかの甕形土器を割った破片で隙間をふさぐようにかぶせている。内部から遺物は出土していない。
 - ・土器棺 3 は割った土器を土坑の上に蓋代わりにかぶせたもので、大型の甕か壺を割つて作られた土器蓋土坑墓である。石棺 3 と隣接し、高さも揃うことから同時期のものである可能性が高い。
 - ・石棺 1 は検出時点で蓋石が一部抜き取られており、残りも原位置を留めていなかったことから盗掘を受けたものと推測される。遺物も出土しなかった。
 - ・石棺 2、3 は検出位置と規模が土器棺と共通するため同時期の小児墓と推測される。

5 遺跡の類例など

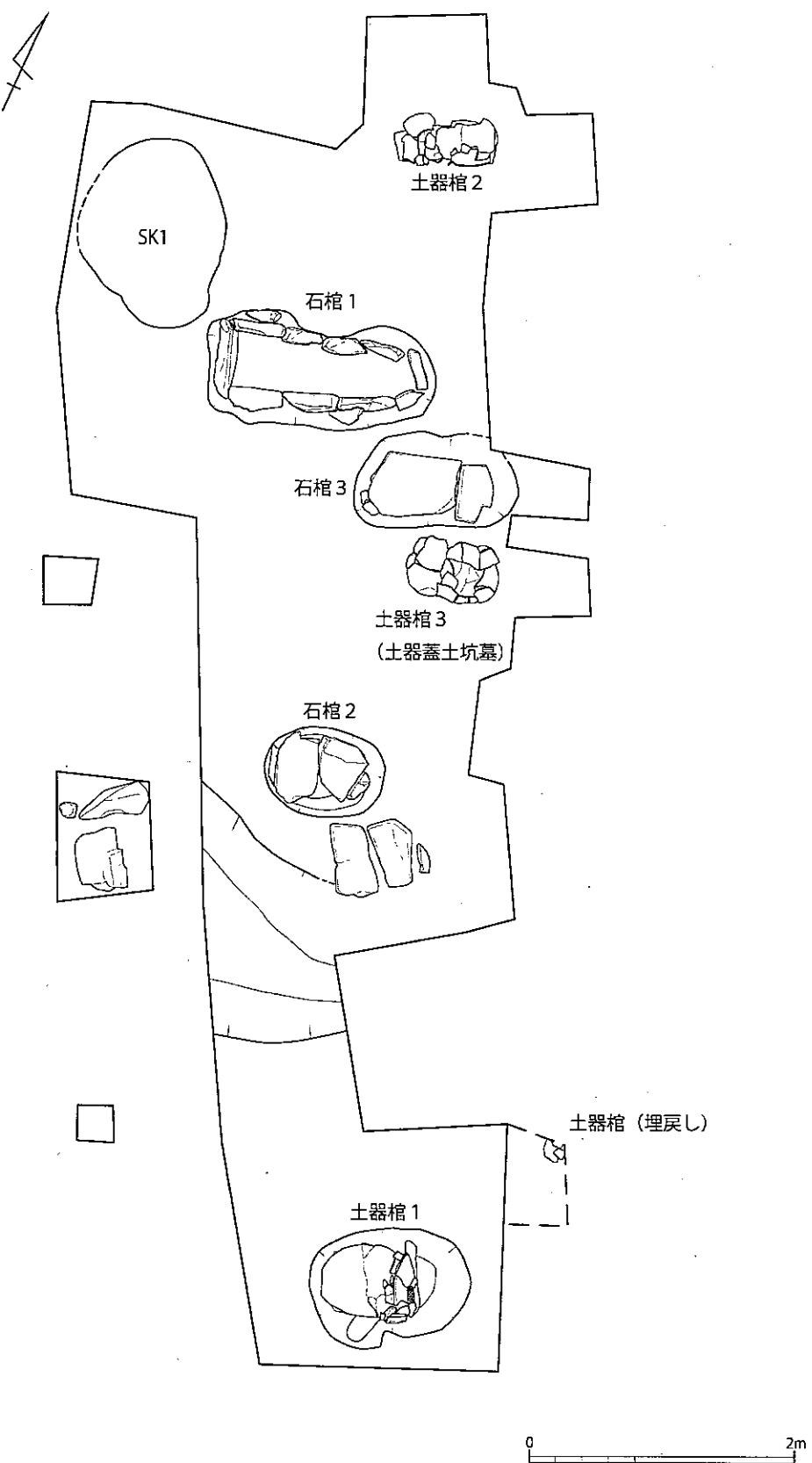
土器棺 1、2 は広島市高陽町の住宅団地開発で見つかった寺迫 3 号遺跡の土器棺群⁽¹⁾に類似しており、用いられている土器の年代や特徴も共通する。いずれも弥生時代後期中葉からやや下る時期（2 世紀頃）で、土器棺 3（土器蓋土坑墓）および石棺 2、3 もほぼ同じ深さから検出されており同時期のものと推測される。石棺 1 はサイズが大きいこと、検出された深さがやや下がることなどから周辺の小児墓とやや時期が異なる可能性もある。

また高陽町で発見された寺迫号遺跡では竪穴住居の近くから小児用の土器棺以外には長軸 2.5m ほどの土坑墓が検出されているのみだが、中島 1 号遺跡は石棺群をともなう墓域の中にあること、近隣の試掘調査でも小型の石棺を検出していることなどから、墓域内で石棺と併用される点において異なる様相を示している。

6 おわりに

（註）

(1) 広島県教育委員会編 1977 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』6「寺迫遺跡」では弥生時代の 6 号住居跡および第 1 号土壙の近くから 3 基の土器棺を検出している。

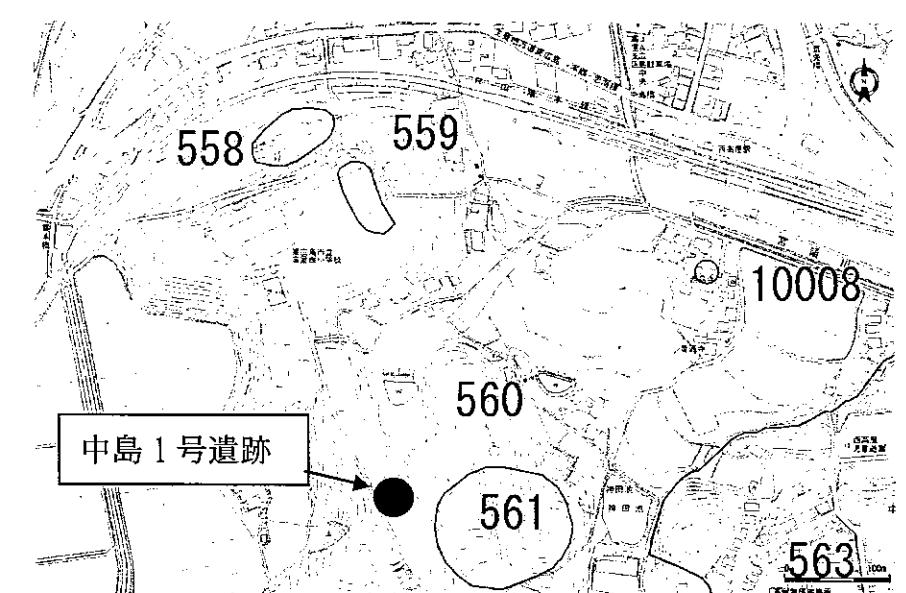


中島 1 号遺跡 遺構配置図 (1:50)



調査区全景（南から）

遺跡周辺地形図



陣が平西2号遺跡の発掘調査について

東広島市教育委員会 文化課 植田 広

1 はじめに

所 在 地：広島県東広島市西条下見五丁目

調査期間：平成26年2月3日から同年3月20日までの約1.5か月間

調査面積：陣が平西2号遺跡全体700m²のうちの半分350m²

調査原因：(仮) Fマンション敷地造成工事に係るもの

・地理的立地について

陣が平西2号遺跡の所在する西条盆地は、標高200m前後の山間盆地であり、瀬戸内（山陽）側の大田川水系と日本海（山陰）側の江の川水系を主流となし、中国地方の東西を結ぶ交通の要衝として古来より重要な位置を占めてきました。また、低平な地形が発達しており、広島県内でも有数な遺跡の密集地でもあります。遺跡はJR西条駅からブルバールを南へ約4.5kmの標高237m前後の独立した低丘陵上に立地しています。遺跡の所在する低丘陵の周辺は、既に後世の大規模開発や宅地化などにより、削平を受けていることから、当時の地形の大部分が失われています。堆積土の主体は花崗岩風化土（マサ土）からなっています。

2 検出した主な遺構について

貼石墳丘墓1基、石蓋土坑墓1基、土坑8基（うち貼石墳丘墓に伴う土坑墓1基、墳墓群に伴う土坑墓4基、土坑3基）などがみつかりました。

3 出土した主な遺物について

弥生土器、石製品（石鎌）、鉄製品（鉄鎌）などが出土しました。

4 調査の成果

貼石墳丘墓：貼石の南北残存長さ約8m

：貼石は、石材を加工し平坦面を造り、その平坦面を上側にして直接、弥生時代の表土層にベタ貼りを施す。

：墳丘には盛土を施していない。

：周溝内から埋葬の儀式の際に供献したと考えられる弥生時代

後期初頭と考えられる壺や高杯などが出土。

：朝鮮半島製と考えられる鉄鎌（曲刃鎌）が出土。

：構築時期は、弥生時代後期初頭頃

石蓋土坑墓：長軸約2.20m、短軸約0.60m、深さ約0.30m

：出土遺物無し。

：構築時期は、貼石墳丘墓と同時期頃か若干新しい。

墳 墓 群：丘陵斜面の北側をカットし、平坦面（テラス）を作り出す。

：土坑墓は4基確認（その形状から木棺墓が推測できます。）

：成人墓2基、幼小児墓2基の構成

：方向は、東西方向を指向する。

：テラス壁面や床面付近から供献されたと考えられる弥生時代中期の低脚付高杯や壺などが出土。

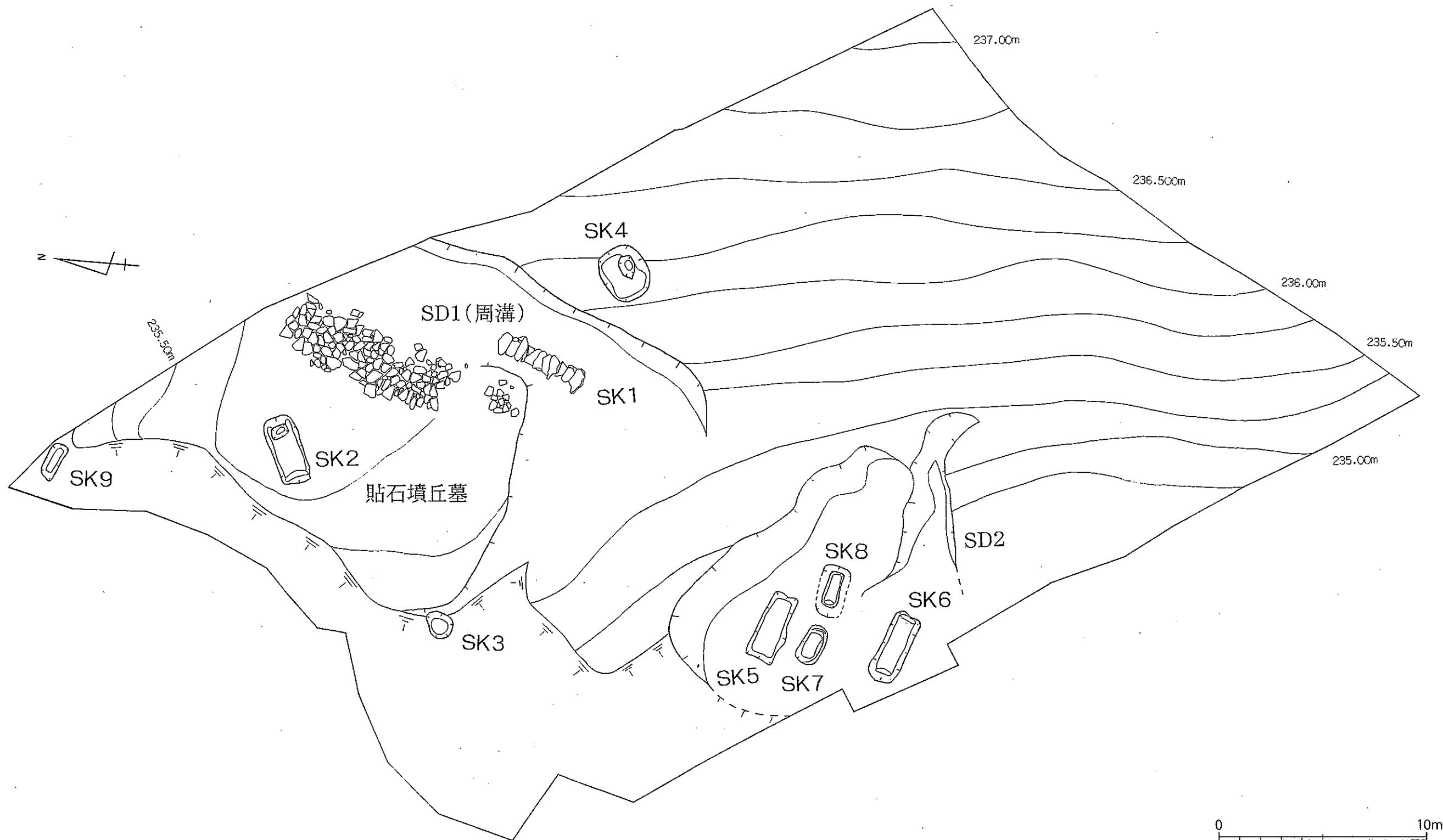
：土坑墓内から石製品（石鎌）が出土。

：構築時期は、弥生時代中期頃

5 おわりに

西条盆地で、貼石墳丘墓が発掘調査されたのは初めての類例です。

構築技術が導入された経路としては、現在の庄原市や三次市方面から入ってきたことが想定できます。今後周辺の調査状況などをみて、交流の状況などを検討していく必要があります。今回の発掘調査により、貴重な資料を提供してくれたものといえます。



陣が平西2号遺跡遺構配置図(1:200)

③ 報恩寺遺跡の発掘調査について

東広島市教育委員会 文化課 中山 学

1 はじめに

所在地：東広島市河内町入野字報恩寺・奥垣内

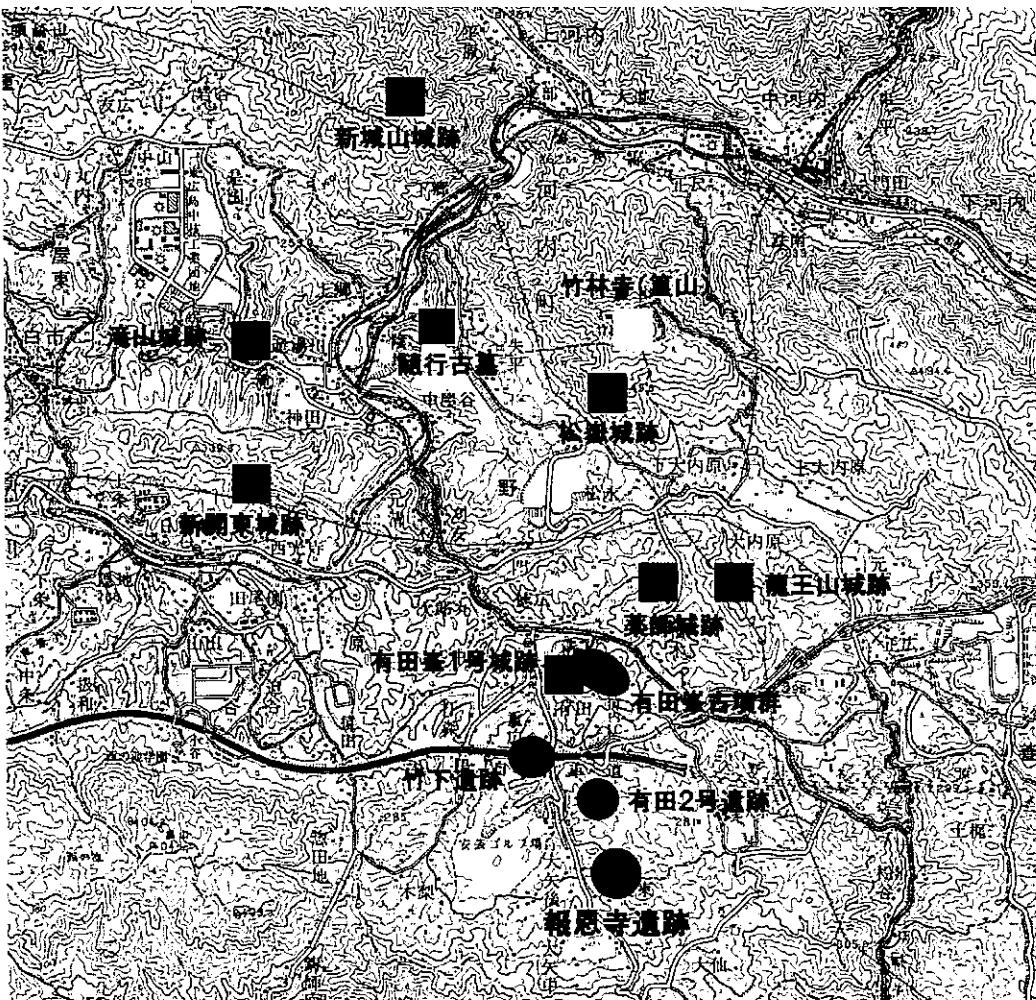
調査期間：平成25年10月15日から同年12月27日

調査面積：660m²

調査原因：市道大矢循環線改良工事

・地理的立地について

報恩寺遺跡の所在する入野地域は、河内町南部に位置し、南側の丘陵を越えると竹原市西野町です。遺跡は大谷川の小支流が入り組んで流れる大矢地区東側の標高230m前後の丘陵部に立地します。

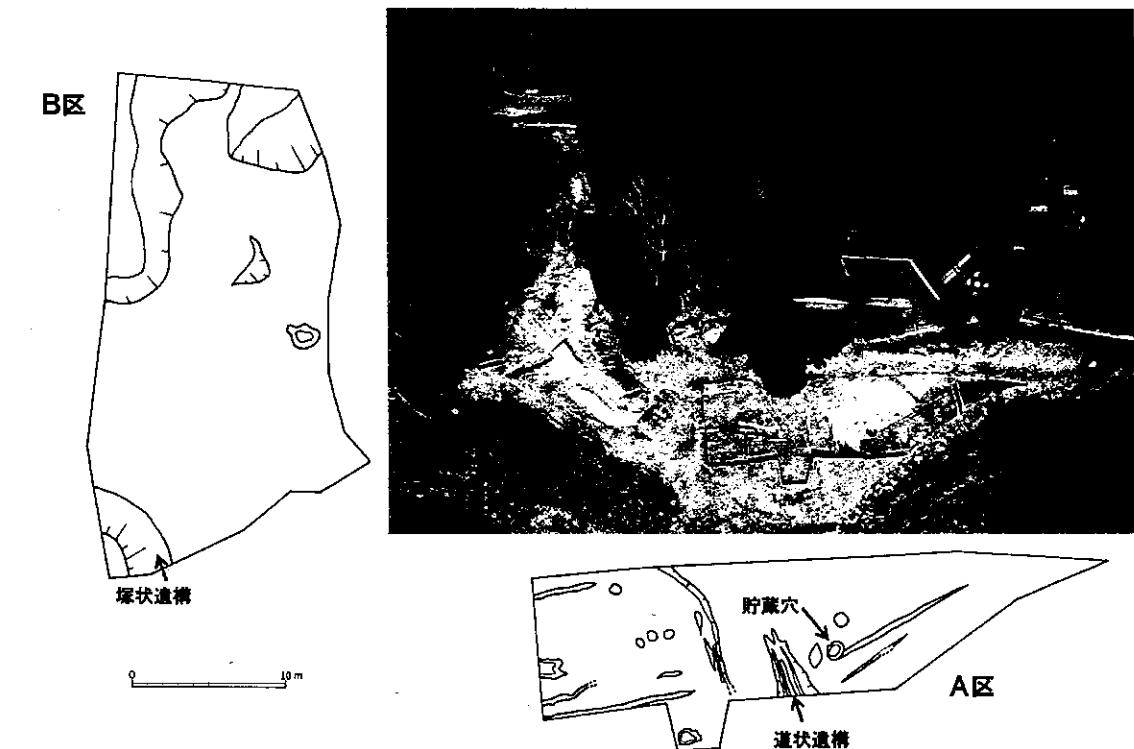


遺跡位置図

2 検出した主な遺構

A区：貯蔵穴1基、道状遺構1本、溝状遺構8条、石垣1列、土坑6基、性格不明遺構2基

B区：住居跡状平坦面2段、塚状遺構1基、性格不明遺構1基



3 出土した主な遺物

弥生土器（後期）、土師質土器皿・土鍋（中世）

近世陶磁器（茶碗、皿、擂鉢、土瓶、褐釉壺）、土師質焙烙（近世）

赤瓦（近世）、鉄滓などが出土しました。

4 検出した遺構の性格

A区

貯蔵穴：直径1.4m、深さ0.4m、弥生時代後期の甕などが出土。

道状遺構：長さ5m、幅2.8m、深さ0.8mで中世のものとみられる土師質土器が出土。

溝状遺構：近世の田や畑の区画施設か？

石垣：近世の田や畑の区画施設

土坑：営農用の土坑（こが壺）か？

B区

塚状遺構：直径 9 m、高さ 2.3 m で近世陶磁器や土師質焙烙、鉄滓が出土。
頂部に祠が鎮座したか？
住居状平坦面：斜面を削ってわずかに平坦面を造り出しているが、柱穴は
検出されませんでした。

5 おわりに

今回の調査では報恩寺に関連する遺構は見つかりませんでしたが、A区で見つかった中世の遺物が出土する道状遺構は、報恩寺中心部が所在するとみられる一段低い平坦面から延びてきていると考えられます。

このことから調査区周辺が中世から利用されていたことが明らかになり、建物跡などが周辺に存在する可能性が出てきました。

報恩寺について

報恩寺に関する唯一の史料は江戸時代後期の広島藩地誌書『芸藩通志』の元になった「稻木村国郡志下調書出帳」に収められている応永三十二（1425）年八月十八日付けの慶仲周賀契状です。

この史料は京都・相国寺の住持（僧）である慶仲周賀が自身の所領地を譲り渡した際の文書です。このなかで彼は現在の高屋町稻木にあった長福寺とともに入野郷大屋村の“報恩寺”を譲ると記しています。

このことから15世紀前半（室町時代中期）には報恩寺は存在していたとみられます。

なお、慶仲周賀は高屋保に根拠を置く国人領主平賀氏出身とみられる人物で、彼は一族の入野時宗が所有していた高屋保のほぼ半分に及ぶ所領の中から3分の2を譲り受けています。

報恩寺古墓群について

調査地の東側約 60 m に所在するこの古墓群は平賀氏とその一族である入野氏や友安氏の墓所と『芸藩通志』に記載されています。うち 2 基の宝篋印塔は平賀氏 15 代当主平賀弘保の次男・入野貞景とその妻の墓と伝えられています。入野貞景の没年は明らかではありませんが、16世紀後半とみられます。

また天正十五（1587）年の平賀元相供付にその名がある友安越中守光久の供養塔もあり、少なくともこの時期まで報恩寺は営まれていたようです。先の慶仲周賀の契状やこの古墓群からは報恩寺が平賀氏と強い結びつきにあったことがうかがえます。

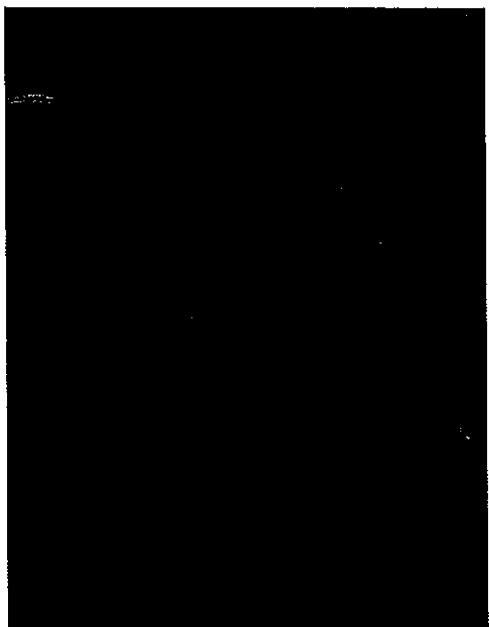
なお、古墓群の中央の宝篋印塔は山口県域によくみられる形態のもので、天正五（1577）年の銘文があり、古墓群の時期を考える手がかりといえます。



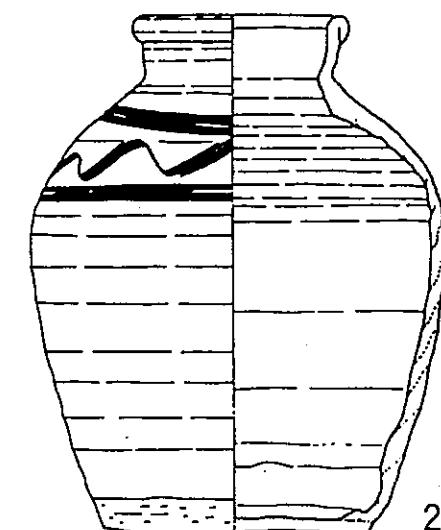
報恩寺古墓群

遺跡付近から出土した備前焼壺について

14世紀末から15世紀前半の形態のもので、先の慶仲周賀契状と時期的に合う資料です。本来はお茶を保管する茶壺として用いるような壺ですが、口を打ち欠いて骨壺として使っています。発見された方によると石塔らしきものもあったようなので、報恩寺に関連する人物の墓に用いられた可能性があります。



報恩寺遺跡付近出土備前焼壺



14世紀末～15世紀の備前焼壺

狐川1号遺跡の発掘調査概要

公益財団法人広島県教育事業団 新井真吾

所在地と周辺の遺跡 狐川1号遺跡は、東広島市西条町寺家字狐川に所在し、西条盆地の北部、龍王山（標高 575m）の南西麓に位置しています。低丘陵の先端部に立地する本遺跡の標高は 232 ~ 235m で、本遺跡の西 140m で南流する黒瀬川周辺の水田とは、8 ~ 11m の標高差があります。

本遺跡の所在する寺家地区では、湯谷迫遺跡（弥生時代・中世、集落跡）、円能寺跡（中世、寺院跡）、平岩古墓（中世、墓）など、多くの遺跡が確認されています。本遺跡から南東 500m には、平成 25 年に発掘調査が行われた福原 2・3 号遺跡（古墳時代・中世～近世、集落跡）や、平成 20 年に発掘調査が行われた横田 1 号遺跡（弥生時代～古墳時代、集落跡）があります。

調査の概要 検出した遺構は、掘立柱建物跡 7 棟（SB 1 ~ 7）、竪穴住居跡 1 軒（SB 8）、土坑 8 基（SK 1 ~ 8）、溝状遺構 9 条（SD 1 ~ 9）、性格不明の遺構 7 基（SX 1 ~ 7）、柱穴群です。遺構の時期は出土遺物から、SB 1・SK 1・SD 1・SX 1・2 が古代、SX 4 が中世、SK 4・SD 7・SX 6 が近世と考えられます。ほかの遺構は、出土遺物が少量または無いため断定はできませんが、埋土の状況などから、古代から中世であると思われます。

出土遺物は、土師器・土師質土器・須恵器・陶磁器・古錢です。土器の多くは須恵器であり、重複関係のある SX 1・2 から主に出土しました。

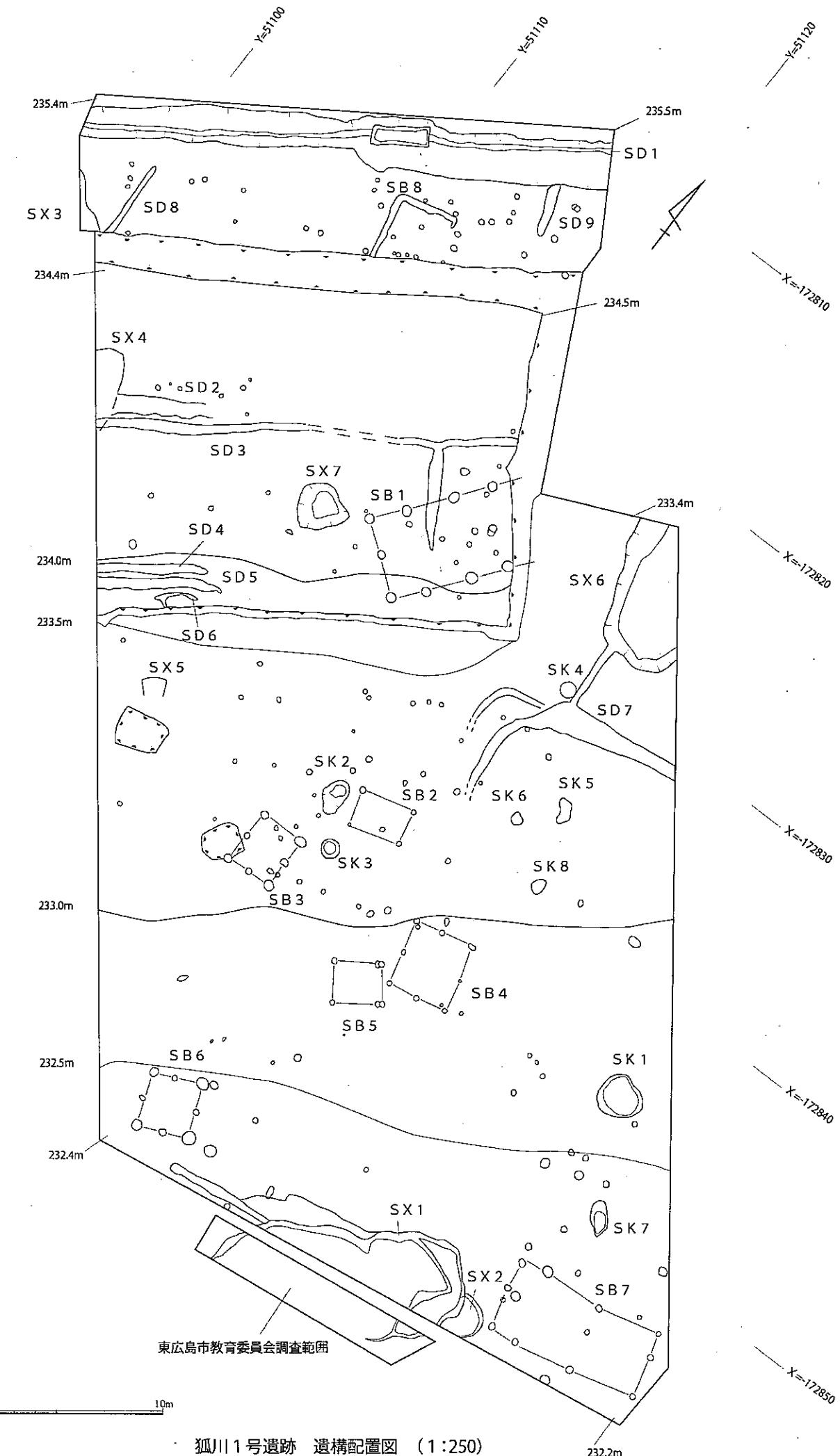
掘立柱建物跡は、SB 1 が梁間 2 間 × 柱行 4 間以上、SB 2・5 が梁間 1 間 × 柱行 1 間、SB 3・4・6 が梁間 2 間 × 柱行 2 間、SB 7 が梁間 2 間 × 柱行 3 間です。最も大きい SB 1 の梁間の柱間距離は 1.3 ~ 1.8m、柱行の柱間距離は 1.2 ~ 1.8m で、建物の主軸（柱行方向）は、北東 - 南西方向です。

土坑は、ほとんどが小規模ですが、SK 1 はやや大きく径 2.1m、深さ 0.15m で、円形に近い平面形をしています。削平を大きく受けていることもあり性格は不明ですが、8 世紀中頃の須恵器が出土し、一部は SX 1 から出土した須恵器と接合しました。SK 1 から南に 9.5m 緩やかに下つて SX 1 があります。

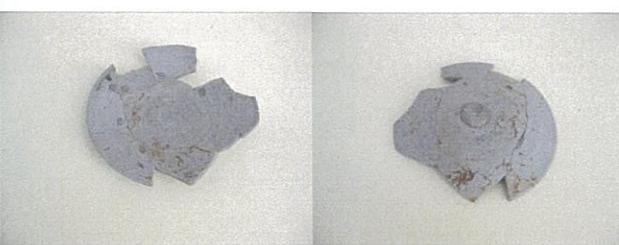
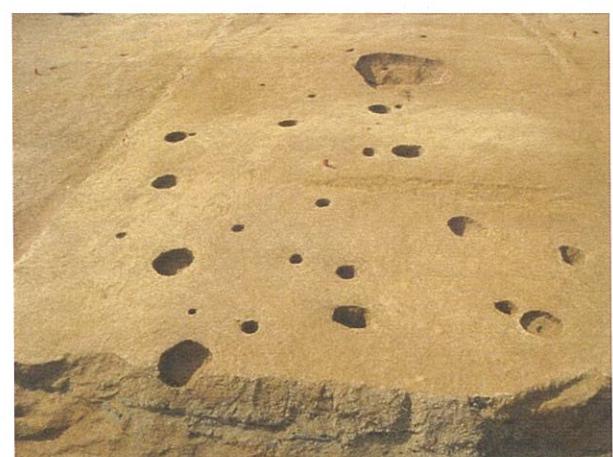
溝状遺構は、検出状況や土層観察などから、SD 1 が道路の側溝として、SD 2 ~ 9 は田畠に伴う小規模な水路として使用されていたと考えられます。SD 1 は現在使用されている道路と並走していますが、この道路は古代から位置を大きく変えていない可能性があります。

性格不明の遺構のうち、SX 1・2 からは須恵器を中心とする土器が多く出土しましたが、上述のように SK 1 と接合するものもあり、流れ込んだもの、または廃棄されたものと考えられます。北東 - 南西方向に延びる両遺構の底はやや平坦ですが、遺構の底や周辺に柱穴等は確認できず、上部に何らかの構造物があったとは考えにくいようです。

まとめ 遺跡の西 80m には、古代山陽道とも考えられている道が通っています。この付近に木綿駅があったという説もありますが、今回の発掘調査では明確な木綿駅の痕跡を確認することはできませんでした。しかし、8 世紀中頃を中心とする須恵器の中に、径 30 cm 以上と考えられる大型の円面鏡の一部も見つかるなど、畿内との往来が窺える貴重な資料を得ることができました。



狐川1号遺跡 遺構配置図 (1:250)



福原2・3号遺跡の発掘調査

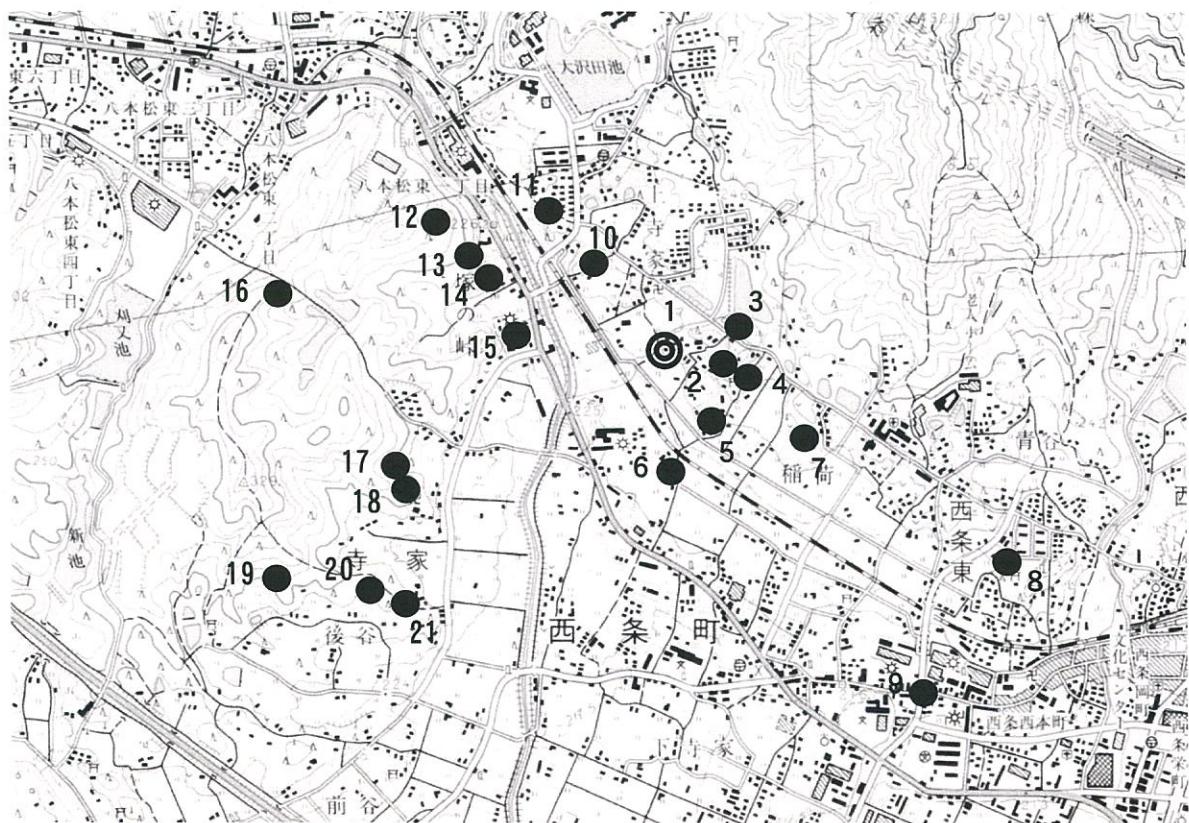
公益財団法人広島県教育事業団 山田繁樹

1 位置と環境

福原2・3号遺跡は、西条盆地の北部、龍王山（標高575m）から南西方向に延びる低丘陵の先端部に立地しています。調査前は水田・宅地で、遺跡から西側には黒瀬川が南東に向かって流れています。本遺跡の標高は228～233mで、黒瀬川周辺の水田とは5～8mの標高差があります。

遺跡が位置する西条町寺家地区では、湯谷迫遺跡（弥生時代・中世、集落跡）、円能寺跡（中世、寺院跡）など、多くの遺跡が確認されています。

本遺跡から谷を挟んだ東の低丘陵には平成20年に発掘調査が行われた横田1号遺跡（弥生時代～古墳時代、集落跡）があり、竪穴住居跡・掘立柱建物跡が確認されています。遺物は土器以外に、再加工された細形銅劍の破片・ガラス製の管玉・小玉が出土しています。



第1図 周辺遺跡分布図（約1:25,000）

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 福原2・3号遺跡 | 2 円能寺跡 | 3 湯谷迫古墓 | 4 湯谷迫遺跡 |
| 5 福原南遺跡 | 6 貞松遺跡 | 7 横田1号遺跡 | 8 諏訪神社周辺遺跡 |
| 9 小西遺跡 | 10 狐川1号遺跡 | 11 平岩古墓 | 12 塚ヶ峠第2号古墳 |
| 13 塚ヶ峠第1号古墳 | 14 塚ヶ峠第2号古墳 | 15 塚ヶ峠第1号古墳 | 16 飢坂第1号古墳 |
| 17 平泰寺古墳 | 18 平泰寺古墓群 | 19 瑞光寺跡 | 20 法花寺古墓群 |
| 21 法花寺跡 | | | |

福原2号遺跡（3,600 m²）

調査の結果、掘立柱建物跡2棟・埋甕13基・埋桶7基・土坑15基・溝状遺構26条・性格不明の落ち込み9基を確認し、古墳時代と中・近世を中心とした集落遺跡であることが分かりました。調査区は旧水田の高低差により上・中・下の3段に分かれ、調査区の南東部にあたる上段から、古墳時代前半頃と考えられる掘立柱建物跡（SB1）と柱並びが不明瞭な柱穴を確認しています。SB1の規模は3間×2間以上の総柱構造の建物で、調査区外の北東方向に柱穴が延びていると考えられます。

中段は掘立柱建物跡（SB1）が立地している尾根の南側と西側を削り、削った土で整地を行っています。土坑や柱穴などを確認した面が3面あります。最も新しい第1面は調査区の北東側で溝（SD1・2）や柱穴群、東側で埋桶や埋甕が見つかっています。SX5は焼土と炭化物の広がりが顕著にみられた地点で、焼土と炭化物を除去すると浅い土坑・柱穴と溝状遺構を確認しています。第2面は第1面の下層から、幅約14m、長さ約20m、深さ約0.5mの範囲で溝（SD3～7）と柱穴を確認しています。溝状遺構の性格は不明で、現在検討中です。第3面は調査区西側で、第1面の整地土を除去した後に遺構を確認しました。主な遺構は柱穴などを含む小土坑で、遺構の埋土がSB1と同じものがあり、古墳時代前半頃の遺構も含まれていると考えられます。

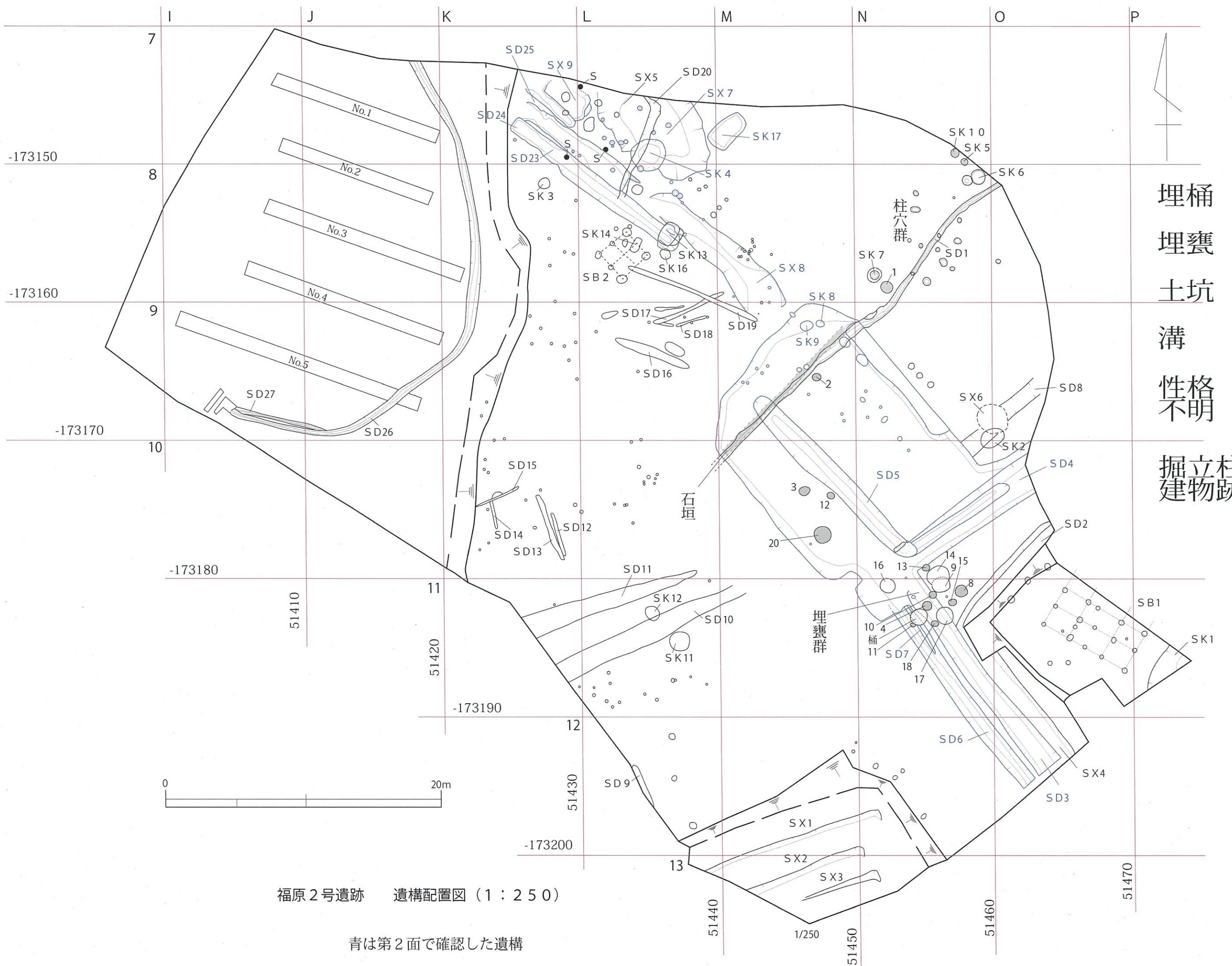
下段は東広島市教育委員会の試掘調査で溝状遺構が1条確認されている地点です。溝状遺構以外には明確な遺構は無く、また、下層の遺構確認のため、トレーナーを5本設定して掘り下げを行いましたが遺構は確認できませんでした。No.1からNo.4のトレーナーの西側は、福原3号遺跡1区～2区で確認した東側の谷地形に対応する傾斜が確認できました。この谷を挟んで東側が2号遺跡、西側が3号遺跡です。



埋桶と埋甕群



SB1掘り下げ作業



福原3号遺跡 (1,200 m²)

調査区の西側（2区）は低丘陵尾根の平坦面、東側は浅谷に向かって下る緩やかな斜面となっています。西側の平坦面から、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、溝状遺構4条、性格不明の遺構2、柱穴群を確認しました。主に中世の遺構であり、古墳時代の遺構（SD4）や近世の遺構（SD2・SX1）も含まれています。

掘立柱建物跡（SB1）の規模は1間（1.7m）×1間（3.4m）です。柱穴の径は31～47cm、深さは27～43cmです。この内、3個の柱穴の埋土から、土師質土器片が出土しています。柱穴の形状などから、柱材の径は10～15cm程度であったと考えられます。

土坑（SX1）の規模は径2.3cm、深さ28cmで、底面は一部二段に掘られています。主な出土遺物は土師質土器で、他の小規模な土坑（SK2～9）の多くからも土師質土器が出土していますが、何れも性格は不明です。

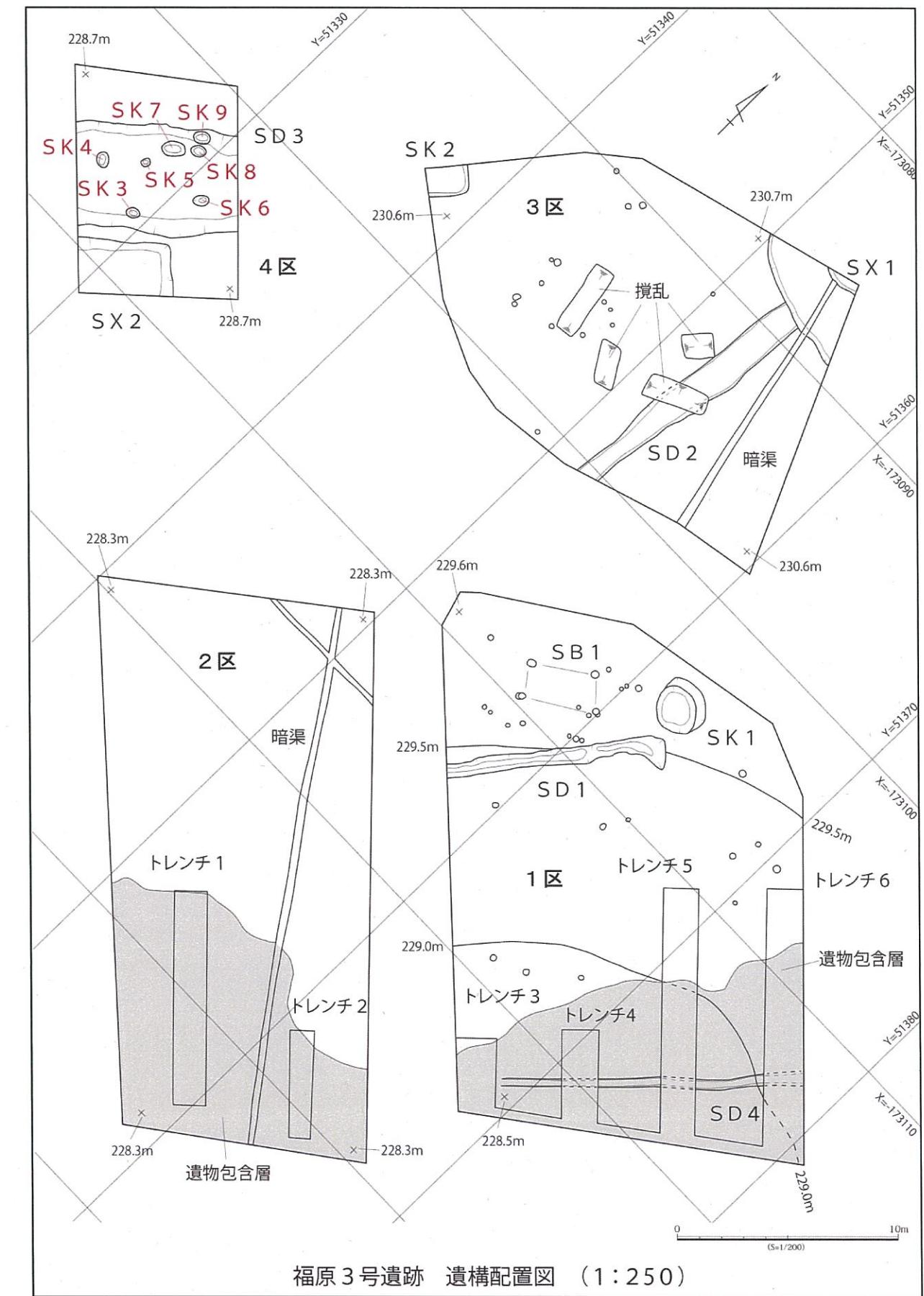
中世や近世の溝状遺構（SD1～3）は、いずれも水が流れた痕跡がないことから、土地の区画として利用されていたと思われます。比較的大きな溝状遺構（SD3）の埋土からは土師質土器が出土しています。SD3と並んでいる性格不明の遺構（SX2）は、SD3と出土遺物や土質、平坦な底面の形状など類似する点が多く、同時期に使用されていた可能性が考えられます。古墳時代の溝状遺構（SD4）は、調査区東半で確認した遺物包含層を掘り込んでおり、土師器や須恵器のほか、弥生土器や加工痕のある木片も出土しています。遺物包含層からは、縄文時代から近世の土器（縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器、陶磁器）、縄文時代や弥生時代前期の石鏃、加工痕のある木片などが出土しています。



調査区全景（北東から）



包含層の調査風景



3まとめ

今回の調査によって、福原2・3号遺跡は中・近世を中心にした集落遺跡であることがわかりました。福原2号遺跡の埋桶や埋甕は2列に並んだ状態であることから、一般的な集落ではなく、何らかの製造か貯水用として使用されていた可能性が考えられます。また、長方形の平坦面の中の溝については、今後、類例の調査や詳細な検討によって性格を考えていく予定です。福原3号遺跡の包含層からは縄文時代から近世の土器が出土しており、この地で長く続いた人々の営みを感じることができます。遺物は弥生時代中期の土器も多く、近くに集落が存在している可能性が高く、遺物の中には「分銅形土製品」も3点含まれています。また、瓦器の椀は畿内で製作された可能性が考えられ、畿内との関係を窺うことができます。